
ヘーゲル論理学「本質論」における世界了解

竹村喜一郎

要約

ヘーゲル (G. W. F. Hegel, 1770-1831) は、原著『論理の学』(Wissenschaft der Logik) の第2巻『本質論』(1813) の「第2編 現象」「第2章 現象」において、カント (I. Kant, 1724-1804) が世界を感性界と叡知界 (悟性界) に分けたことに対して両世界を一つのものとし、また「第3章 本質的相関」においてはカントがいわゆるアンチノミーを定立して世界をそれ自体としては論じられないとしたのに対して、全体としての世界の論及可能性を説いている。つまりヘーゲルは「第2編 現象」の中心テーマを世界とし、カントを批判することを通じて世界を力学的運動法則が貫徹する場とみる立場を否定し、世界を事物が生成・消滅する場とする視点を提出している。そのような動的な世界把握のうちには、世界の中の出来事を分割することができないとする「非局所性」の概念や、現在のうちに未来が含まれているとする「内包的秩序」の思想の先取りが確認される。

キーワード：世界，法則，アンチノミー，力，本質

はじめに

ヘーゲルは、『論理の学』第2巻『本質論』(Die Lehre vom Wesen) の「第2編 現象 Die Erscheinung」を「第1章 現実存在 Die Existenz」, 「第2章 現象 Die Erscheinung」, 「第3章 本質的相関 Das wesentliche Verhältnis」に分けて展開している。先行する第1編「それ自身における反省としての本質 Das Wesen als Reflexion in ihm selbst」が「第1章 映現 Der Schein」, 「第2章 諸本質態または反省諸規定 Das Wesenheiten oder die Reflexionbestimmungen」, 「第3章 根拠 Der Grund」として構成され、哲学史上「本質」として扱われた内容が主として展開され、その現出が第2編「現象」として主題化されていることは、その第1章「現実存在」の内容が「A物とその諸性質」, 「B諸物質からの物の成立」, 「C物の解消」とされていることから確認される。つまりスコラ哲学の伝統からすれば、ヘーゲルは第1編全体で *essentia* (本質) を扱い、第2編第1章で *essentia* の現出としての *existentia* (現実存在) を展開したことになる。このように見るなら、第2編第2章「現象」はその構成からして第1章で扱われた「物」から形成される世界、すなわち現象的世界が扱われていることになる。また第3章「本質的相関」の「A全体と諸部分の相関」においてカントの『純粋理性批判』における第2アンチノミー (定立「世界における各複合的実体は単純な部分からなり、かつ実際に存在するものは、いずれも単純体か、もしくは単純体から合成

されたものにはかならない」(KrV. A434, B462) 一反定立「世界におけるいかなる複合物も単純な部分からはつくられない。世界には一般に単純なるものは実際には存在しない」(KrV. A435, B463)) に対して批判を加えていることから「本質的相関」においても世界が主題化されていることが確認される。こうした視点に立つとき、ヘーゲルはこれら2つの章でカントに対して自己の世界了解を対置していることが明らかになる。したがって本論文では「現象」および「本質的相関」という2つの章におけるヘーゲルの世界了解の特質を探ることを課題とする。

1. カントの自然法則把握に対する批判

ヘーゲルは『論理の学』『本質論』第2編「現象」の第2章「現象」「A 現象の法則 Das Gesetz der Erscheinung」においてカントの自然法則の導出方法・存在性格の規定・証明の仕方に暗示的に批判を加えている。ヘーゲルが付けた「現象の法則」という表題は自然現象に法則が内包されているという彼の法則観を表明している。

(1) カントの自然法則の導出の仕方に対する批判

カントは『純粹理性批判』において現象と自然法則との関係について「現象は『生起するものはすべて原因を有する』等の自然法則によってはじめて自然となり、また経験の対象になりうる」(KrV. A542, B570) と述べている。

カントにとって我々に与えられる第一のものは現象であり、「いかなる現象も多様なものを含んでいる」(KrV. A120)。より限定的には次のようにいわれる。「あらゆる現象は、対象そのものとしての常住不変なもの(実体)と実体の単なる限定、すなわち対象が実際に存在する存在の仕方としての変転するもの〔偶有性〕を含んでいる」(KrV. A182)。カントによれば、現象は不変な実体とその偶有性としての変転するものから成る。

だが上で確認したように、カントにおいては現象が直ちに自然なのではない。カントによれば、「〔自然〕法則は、現象のうち存在するのではなくて、悟性を有する限りの主観に対してのみ存在する」(KrV. B164)。つまりカントにとって「我々が自然と名付けているところの現象の秩序や合法則性は我々自身が現象の中に持ち込んだもの」(KrV. A125)なのである。したがってカントにおいて自然法則は客観的に存在するものではなく、「悟性とそのア・プリオリな形式〔カテゴリー〕」(KrV. B164)に合致するものとされる。要するにカントにおいては我々に与えられる現象の集積は、悟性が定立する自然法則によってはじめて自然という体裁をとるのであり、自然そのものが自然法則を具えているのではない。

これに対してヘーゲルは現象を総括的には「非本質的な多様体の中に投げ散らされた、存在的な複多的な差異性」(GW11.343)と捉える。つまり現象は多様なありかたをする個別的現実的なものの集合体である。個別的な現実存在するものは、ヘーゲルによれば、自分の否定を通じた「自己自身への還帰」(GW11.342)として「実在的自立態」を有するにせよ、否定すなわち他者を自分の根拠として持つことによって自存するものでなく、「定立された存在」(ebd.)にすぎない。したがっ

てこのような現実存在するものからなる現象世界は「偶然的な、非本質的な定在」（GW11.343）として、現実存在するものが「移行する運動、生成しかつ消滅する運動」（ebd.）を展開する場と捉えられる。すなわちヘーゲルは、カントのように現象のうちに単純不変な実体を認めることはなく、すべての現実存在を生成・消滅という運動のうちにあるものと捉える¹⁰。

だがヘーゲルは現象のうちに生成・消滅という否定的側面のみを見るのではない。彼は現象のうちに「現実存在するものの自己との肯定的同一性」（ebd.）が存することを指摘する。この同一性は具体的には個別的な現実的に存在するものが行う運動が落下運動なり、投射運動なり、衝突なりまたその他の特定の運動と規定される事態を指している。

ヘーゲルはさらにこのような「現象の反省した内容」が現象の實在的なものとして「完全な規定態」すなわち時間と空間との特有の関係を有するとし、空間と時間との関係を各々は他者の非存立のうちにあるという仕方で自分の存立を持つという矛盾を有するとする（ebd.）。これは例えば落体運動が $S = \frac{1}{2}gt^2$ で表現される場合、左辺（空間）には時間が現れず、右辺には空間が現れないことを意味する。だがヘーゲルは落体現象が上の式で表現されることによって「非本質的内容の、自己を揚棄するという否定的なものが同一性へと還帰している」（GW11.344）という事態が存立するとする。こうしてヘーゲルは現象の矛盾した内容が矛盾しながら同一性を保つという同一性と差異性との統一を「現象の法則」（ebd.）と規定する。つまりヘーゲルは、自然法則を現象に内在するものと捉えるのである。

（2）カントの自然法則の存在性格規定に対する批判

カントにおいては自然法則は、既にみたように、悟性が定立する主観的性格を有するものであって、客観的性格のものではない。カントによれば、「自然法則は自然から導来されたものでなければ、また自然を範とするのでもない」（KrV. B163）。

これに対してヘーゲルは自然法則を現象に内在するものとし、そこからさらに客観的性格を有するものとする。すなわちヘーゲルは法則をドイツ語の語源から現実存在の存在的な直接態に対して「定立された存在 Gesetzsein」（GW11.344）という規定を有し、またそれ自身「相互に差異された、直接的な内容」（ebd.）、すなわち天体の運動法則、落体の運動法則等固有の内容を持つことから、現象と法則の存在性格に相違があることを指摘する。しかし同時にヘーゲルは「現象と法則とは同一の内容を持っている」（ebd.）とし、現象と法則の相違を「直接的なものとしての現象」と「自己へと反省したもの」（法則）という「形式」の違いとする（vgl.ebd.）。したがって法則は「現象そのものとその反省との實在的な同一性」（GW11.345）であり、この同一性は「現象から法則へと連続している内容」（ebd.）とされる。

こうしてヘーゲルは法則を現象のうちに現在しているものとし、「法則の国は現実存在する、ないしは現象する世界の静止した模造である」（ebd.）と結論する。ヘーゲルによれば、現象の国と法則の国は一つの「総体性」であり、現実存在する世界と法則の国は単一な同一的なものである（vgl.ebd.）。こうしてヘーゲルは法則を現象と一体的なものとし、その存在が客観性を持つことを主張する。

(3) カントの法則の証明の仕方に対する批判

ヘーゲルは、さらにカント批判という視角から、個別的経験的自然法則が現象すべてを包括せず、自らの必然性を証明できないことを「欠如」(GW11.346)と明示する。すなわちヘーゲルによれば、法則が非本質的な現実存在との同一的内容を含むにせよ、現象と法則との同一性は「ただ直接的な、単一な同一性」(GW11.345)にすぎず、法則は現象に対して無関心的である。つまり現象は法則の内容に対して別の内容を有し、現象はそれによって「法則のうちに含まれていない、他者によって規定されている、より詳しい諸規定の集合」(ebd.)である。つまり、現象が現象であるのは「現象に属している形式と形式の運動そのもの」(GW11.346)によってであり、法則の国は「現象の静止した内容」(ebd.)であるが、法則は現象の「静止していない形式ないしは否定態というこの側面」(ebd.)を含んではいない。ここからヘーゲルは法則に対する現象の優位性を「現象は法則に対して総体性である」(ebd.)と明言する。

ヘーゲルは法則のこのような欠陥を「法則の両側面〔空間と時間〕の相互の同一性はやっとな直接的な、そしてそれとともに内的な、ないしはまだ必然的でない同一性にすぎない」(ebd.)と規定する。具体的にはヘーゲルは落体の法則における空間の大きさと時間の大きさの結合が直接的な関係にすぎず、一方の項が他方の項をそれ自身のもとに現わしていないことを指摘する(vgl.ebd.)。ここからヘーゲルは法則が単に見いだされるだけでなく、必然的であることを認識に対して証明すること、すなわち媒介が必要であることを揚言し、「この証明とそれの客観的必然性を法則そのものは含んでいない」(ebd.)と断言する。ヘーゲルにおいて必然性は明確に異なるもの同士が同一であることを意味する。カントはガリレイによる落体運動の法則の発見によって自然科学が初めて学問としての確実な歩みを始めたことを称えたが(vgl. KrV. BXII f.), ヘーゲルは落体運動の法則には証明が欠けているとみるのである²⁰。

ここから明らかになることは、物把握の次元と法則把握の次元ではカテゴリー上の相違があり、カントは法則把握次元のカテゴリー化には達しえなかったとするヘーゲルの批判があることである。周知のようにカントは認識の成立には現象を整理する、悟性によって定立される「形式」と知覚に対応する「質料」とを不可欠としたが(vgl. KrV. A226f., B322f.), ヘーゲルも「形式と質料」を根拠の1形態とし(vgl. GW11. 297-301), 現実存在を「質料と形式との自己と同一的なもの」(GW11. 345)と規定している。だがヘーゲルは「形式」をカントのように主観的なものとするのではなく、現実存在が具える客観的なものとする。更にヘーゲルは「形式と質料」より高次のカテゴリーを「形式と内容」とし、「内容」を「形式と質料において同一的なもの」(GW11.301)と規定している。ヘーゲルはこのようにして「形式と内容」というカテゴリーに基づいて法則の吟味を行い、落体運動の法則においては法則の両項は関係づけられていて法則は「本質的な形式」(GW11. 347)であるにせよ、両項の内容はこの関係に無関心であることによって「内容としてのこの形式の両項へと反省した実在的な形式」(ebd.)ではないとする。実在的形式とは内容規定が形式の両契機としてあり、このような契機として自分の他者へと移行して、それぞれが自分のもとで同じく自分の他者でもあるという在り方である。

2. カントの感性界と叡知界の区分に対する批判

(1) 普遍的法則とそれ自体で存立する世界

ヘーゲルは「B 現象する世界とそれ自体で存在する世界 Die erscheinende und die an-sich-seiende Welt」において、経験的・個別自然法則とは異なる、それ自身が「法則の否定態でありかつ法則の他者」(GW11.347)である「法則」があるとす。このような法則を定立することによって目指されたのはカントの2世界説の克服と言える。

カントは先験的感性論において現象の概念が感性界に属するものと制限されたことが本質体が客観的に実在することの暗示となり、「対象を現象体 *Phaenomena* と本質体 *Noumena* とに分かつこと、したがってまた世界を感性界と叡知界 (*mundus sensibilis et intelligibilis*) とに分かつことが是認されている」(KrV. A249) とす。カントはこのような2世界説に対応付けるかのように、あらゆる経験的法則とそれらを超えた悟性の「純粋法則」の存在を挙げ、経験的諸法則を純粋法則の特殊の限定とした上で (vgl. KrV. A128)、次のように述べている。

「特殊な自然法則は、もっと普遍的な法則のもとに包摂され、原理をできるだけ少なくしようとする要求は理性の経済原則となるばかりでなく、自然の内奥に存在する法則となる」(KrV. A650, B678)。

ヘーゲルがこのような純粋法則＝普遍的法則の実在性を承認したかどうかはともかく、彼はカント的な2世界説を克服するための1階梯として「それ自体で存在する世界」とそこで妥当する「普遍的法則」を設定する。そしてヘーゲルは普遍的法則においては法則の両項は「相互に否定的に関係しあう項」として各項はそれぞれ自身が他の項との「否定的統一」であり、各々が自分自身のもとに自分の他者を含みかつ同時に自立的なものとしてこの自分の他者を自己から突き放す項としてあるとする (vgl. GW11. 348)。こうしてヘーゲルによれば個別的経験的法則においては獲得されなかった「証明と媒介」が達成され、法則の両項の同一性は「定立された、かつ実在的な同一性」(ebd.) となる。

このような法則の両項の同一性の実在化は、今や法則が「現象の実在的総体性」を「実在的否定態」として自らのうちに含むことを意味する。つまり当該の法則は天体運動、落下運動等々現象のあらゆる運動の内容を含むから、法則の内容は「自己を総体性とする、実在的な関係」(ebd.) であることになる。こうして自己へと反省した法則は、ヘーゲルによれば、「今やそれ自体で自立的に存在する世界として現象する世界の上に見れる一つの世界」(ebd.) すなわちそれ自体で自立的に存在する「超感性的世界」(GW11. 349) となる。

(2) 現象する世界の転倒した世界としての自体で存在する世界

それ自体で自立的に存在する世界である普遍的な法則の世界は、現実存在の総体性の表現でもある。だが、ヘーゲルによれば、この世界はそれ自身のもとで「絶対的否定態ないし絶対的形式」(ebd.)、すなわち自己の否定によって自己に同一的であるものであるものであるので、その自己内反省、すなわち存立は「自己への否定的関係」である。ここから本質的世界は現象世界に対して差異された

自立態を有し、現象世界は本質的世界のもとに自分の否定的統一を持ち、この統一の中で没落するので、本質的世界は現象する世界の「規定された根拠」(ebd.)である。つまり法則の国は、現象する世界に属していた「否定的契機」(GW11.350)を今や自分のもとにも持っているのだから、現象する世界の内容の総体性であり、かつ現象する世界のあらゆる多様体の根拠であるのである (vgl. ebd.)。ここに法則の国は現実の世界に対するプラトンのイデア界と同一の性格を持つものと捉えられる。

しかし、ヘーゲルはプラトンのイデア界を是認するのではない。すなわちヘーゲルは法則の国、本質的世界を「現象世界に対立する世界」(ebd.)として捉える。ヘーゲルによれば、法則の両項の各々は否定的統一の中ではそれぞれ他方の内容であり、他者すなわち現象世界は自分の他者であり、他者も同じ内容規定を含んでいる。法則の国はこの否定的契機および対立を自分のもとに持っており、それとともに総体性としてそれ自体で自立的に存在する世界へと自己を突き放すのであるから、これら法則の国と現象世界の同一性は「対立という本質的關係」(ebd.)と規定される。ここからヘーゲルは「対立した〔両〕規定の同一性は本質的に生成へと移行する運動であって、もはや根拠關係ではない」(ebd.)と言う。すなわち二つのものの關係が根拠關係であれば、根拠づけるものと根拠づけられるものとの優劣關係が生じるが、対立關係においては対抗する両者は対等であり、位置が相互に反転するだけになる。したがってヘーゲルは2つの世界の關係を「それ自体で自立的に存在する世界は、現象する世界の転倒した世界であるという關係」(ebd.)と規定する。

こうしてヘーゲルはカントが峻別した現象界と叡知界を同一内容の分化した形式と捉え返し、叡知界を、一方では「何らの対象も規定できない」(KrV. A255, B311)不可知の世界としながら、もう一方では「普遍的自然法則」(KrV. A815, B843)が支配する世界とするカントの立場を批判する。こうしてヘーゲルは論理的次元で現象界と叡知界の同一性を導出したと言える。

(3) それ自体で存在する世界の背理性

ヘーゲルは「C 現象の解消 Auflösung der Erscheinung」においてそれ自体で自立的に存在する世界と現象する世界との対立において両者の区別が消失することを次のように言う。

「実際には両世界のこの対立においてまさに両者の区別は消失しており、それ自体で自立的に存在する世界であるとされていたものがそれ自身現象する世界であり、また逆に後者はそれ自身のもとで、本質的世界である」(GW11 351)。

ここにおいてヘーゲルは、それ自体で存在する世界、すなわちプラトンのイデア界、カント的な叡知的世界を定立することの背理性を説いていると言える。理由は本質的世界そのものが現象世界にはほかならないからである。すなわちヘーゲルによれば、現象する世界は最初それ自体で存在する世界への反省であると規定され、その結果現象世界の諸規定と諸現実存在は、他者すなわちそれ自体で存在する世界のうちにそれらの根拠と存立を持つとされた。だがこの他者が同じくまたその他者、すなわち現象界へと反省したものであるから、現象世界の諸規定と諸現実存在は、この他者においてもっばら自己を揚棄する他者へと、だから自己自身へと關係しており、現象する世界は自分自身のもとで自己自身に等しい法則であることになる (vgl. ebd.)。逆にそれ自身で自立的に存在する

世界は、最初自己と同一的な内容であるにせよ、この内容は現象世界の自己自身への完全な反省であるから、否定的な、運動的な契機を、また他在としての自己への関係を含んでいる。このことによって自体で自立的に存在する世界の内容は「自己自身に対立した、自己をひっくり返す、本質を欠いた内容」（ebd.）である。

以上のように、ヘーゲルは現象する世界と本質的世界とをそれぞれがそれ自身のもので自己と同一的な反省と他者への反省との統一である「現実存在の自立的な全体」（GW11.352）であり、各々が自分の他者の中で自己に連続しており、それゆえに自分自身のものでこれら2つの契機の同一性とする。ヘーゲルはこの同一性について、「現存しているものは自己自身から自己を二つの総体性へ突き放すこの総体性であり、突き放された一方は反省した総体性であり、他方は直接的な総体性である」（ebd.）と言う。したがってヘーゲルが二つの総体性に分離する以前の総体性をより根底的なものとし、根源的総体性を現実世界に見据えていることは、「現象のうちに内容の二つの総体性が成立している」（ebd.）と言われるところに確認される。

表題は「現象の解消」となっているにせよ、それ自体で存在するとされる世界そのものが現象世界の抽象体であることを明示することによって、ヘーゲルはそれ自体で存在する世界の解消を図ったのである³⁾。

3. 全体と諸部分との相関

ヘーゲルは『論理の学』「本質論」第2編「現象」第3章を「本質的相関 Das wesentliche Verhältnis」として展開している。本質的相関は、当初は関係する両項が直接的な自立態、すなわち「実在的直接態および反省した直接態ないしは自己と同一的な反省」（GW11.353）を持ち、同時に両項がこの自立態において「端的に自分の他者への反省、ないしは自分の他者との関係という統一」（ebd.）としてあることを内容とする。この内容はこれまで展開されたことの論理的集約である。ヘーゲルの本質的相関はカントが『純粹理性批判』の「第1部門 先験的分析論」の付録とした「反省概念の二義性について」の批判であり、その第一形態が「A全体と諸部分との相関 Das Verhältnis des Ganzen und der Teile」である⁴⁾。

(1) カントの第2アンチノミーに対する批判

カントは「反省概念の二義性」の第1として「一様性 Einerleiheit と差異性 Verschiedenheit」を挙げている。そこでカントはある対象がいつも同じ内的規定（質および量）をもって示され、純粹悟性の対象とみられる場合、常に同一な一つの物（数的同一 numerica identitas）とする。これに対してその対象が現象である場合には、概念が同一であっても、この現象が同時に異なった場所にあるということは、対象（感官の）そのものの数的差異性の十分な理由になるという（vgl. KrV, A263, B319）。ここでカントが一様性によって叡知界を、差異性によって感性界を特徴づけたことは、その箇所ではライプニッツが現象をものそれ自体と考えたと批判していることから明らかである。そしてカントがこのような二つの世界規定を前提に『純粹理性批判』の「第2部門 先験的弁証論」

「第2章 純粋理性の背反論」において第2アンチノミー（定立「世界における複合的実体は単純な部分，すなわち不可分なものから成る。」一反定立「世界に単純体なるものは存在しない。世界は無限に分割可能である。」）を提出し，現象世界に関する対立する世界が成立することによって叡知世界の把握不可能性の論証としようとしたことは次のように言われるところに確認される。

「もしも世界がそれ自体で実際に存在する全体であれば，それは有限であるか無限であるかである。ところが有限であるというも無限であるというも，ともに誤りである（一方は反定立に関して，他方は定立に関して上に述べた証明によって）。だから『世界（あらゆる現象の総括）がそれ自身で実際に存在する全体である』と言うことも誤りである」（KrV. A506f., B534f.）。

こうしてカントは「現象の系列を経験的に遡源して行くところのみ世界は存する」（KrV. A505, B535）とする。

ヘーゲルの「全体と諸部分との相関」の全体は「総体性ないしは万有 Universum」（GW11. 352）としての世界である。したがってヘーゲルの「全体と諸部分との相関」はカントの第2アンチノミーの批判を通してはじめて成立する⁶⁵。だが結論的に言えば，ヘーゲルはカントの第2アンチノミーが成立しないことを言う。まず第一に第2アンチノミーの反定立が言う無限性は世界そのものの大きさの無限性ではなく，カント自身言うように物質の無限分割可能性である。第二にその無限分割性に関しても，「ここに成立している進行の無限性とは，両規定〔全体と諸部分〕のそれぞれが自分の自立態および他方の規定態からの分離によって，非自立態および他方の規定へと移行するという，この媒介が含んでいる二つの思想を一つに合わせてつかむ能力がないということである」（GW11. 359）とヘーゲルは批判する。すなわちカントにおいては現実存在するものあるいは物質が全体として規定されれば，それは諸部分に分割され，その諸部分の一つ一つが新たな全体として分割され，同じようにして分割は無限に進行することになる。だがヘーゲルからすれば，現実存在するものあるいは物質がそれ自身に即して全体と諸部分との相関として捉え返されれば，無限進行に陥ることはないのである。つまり現実存在するものなり物質なりは一定の量を持つが，一定の量は「連続性 Kontinuität と離散性 Diskretion との統一」（GW11. 358）であるから，連続性が全体を構成し，離散性が諸部分を構成するとみなされれば，無限進行はやむのである。したがって世界を連続性からなる全体と捉え，諸現象を離散性からなる諸部分と捉えれば，全体と諸部分との相関は成立するのである⁶⁶。

以上のようにカントの第2アンチノミーの批判の上にヘーゲルは全体と諸部分との相関を展開する。

（2）全体と諸部分との相関の展開

①それ自身で直接的矛盾である相関

最初の相関の両側面は「完全に自立的に存在する世界をなしていた自立態〔全体〕」（GW11. 355）と「現象する世界であった直接的な現実存在〔諸部分〕」（ebd.）である。これら両側面は自立態であるが，すでに確認したように，それぞれの側面が他の側面を自分のうちに映現させ，同時に両側面の同一性（否定的統一）としてある。こうして全体と諸部分とは，それぞれが自分の自立態にお

いて端的に他者の相関的なもの、すなわち他者があって初めて自己があるもの、すなわち「契機」なのである。ヘーゲルはこの相関をそれ自身のもとで「直接的な矛盾」(ebd.)と規定し、その自己揚棄を説く。

②全体と諸部分の相互制約

矛盾の揚棄は全体と諸部分が相互に制約しあっていることの確認から始まる。ヘーゲルによれば、全体は反省した統一で、自立的存立をそれ自身で有しているが、全体のこの統一はその存立を自分の反対のもの、すなわち多様な直接態である諸部分のもとに持っている。だから「全体は諸部分がなければ何ものでもない」(ebd.)。つまり全体は自立的な総体性であるが、全体を総体性たらしめているのは諸部分であるから、全体は自分の存立を諸部分のもとに持っているのである (vgl. ebd.)。

諸部分についても同じことが言える。諸部分は反省した自立態としての全体に対立する直接的な自立態であり、それだけで存在するが、同時に全体を契機としてそれらのもとに持っている (vgl. GW11. 356)。だが諸部分は、多様な現実存在としては、反省を欠いた存在であるから、自分自身だけでは崩壊する。なぜなら諸部分はそれらの自立態を反省した統一、すなわち全体のうちにのみ持っているからである。だから「全体なしには諸部分はありえない」(ebd.)。

以上のように全体と諸部分は相互に制約しあっているのである。

③相関のうちに発現する二つの事態

ヘーゲルは相関の両側面の相互制約のうちに二つの事態が存することを指摘する。

まず第一の事態は、相関の両側面が自分の自立態を自己の他者のうちに持っていることから、「両者の唯一つの同一性」(ebd.)が現存し、この同一性のうちでは両者は契機にすぎないということである。この両側面の実在的な同一性からすれば、「全体は諸部分に等しく、また諸部分は全体に等しい」(ebd.)。つまり諸部分のうちに存しないものは全体のうちに存せず、また全体のうちに存しないものは諸部分のうちに存しない。この場合全体は「差異された多様体の統一としての統一」(ebd.)であり、この統一の中で多様なものは相互に関係し、多様なものの規定態が与えられ、このことによって多様なものは諸部分となる (vgl. ebd.)。したがって、ここでは全体と諸部分との「不可分の同一性」(ebd.)が成立しているのである⁷⁾。

ヘーゲルが指摘する第二の事態は、全体と諸部分との相関の中には全体と諸部分とが自立態であるという側面があるということである。つまり全体は差異された多様なものとしての諸部分に等しいのではなく、「合わせられた諸部分」(GW11. 357)に等しいにすぎない。諸部分も同様に、統一の全体に等しいのではなく、分割された全体としての全体、すなわち諸部分としての全体に等しいのである。

以上のように、ヘーゲルは、全体と諸部分には同一性ととも、相互に無関心に別れ別れになり、自己にのみ関係するという側面があることを指摘する。だが「そのように別れ別れになると、両者は自己自身を破壊する」(ebd.)。

(3) 相関の真理態としての媒介

以上のように全体と諸部分のそれぞれの自己関係、自立化はそれら自身の否定である。それゆえ

各々の側面はそれらの自立態をそれら自身のもとではなく、他の側面のもとに持ち、この他の側面はそれぞれの側面の前提された直接的なもの、最初のものであることになる。だが実際にはそれぞれの側面はそれ自身が最初のものではなくて、他者のもとに自分の端初を持っているものにすぎない。ヘーゲルは全体と諸部分との相関について次のように言う。

「相関の真理態は媒介に存在する。相関の本質は反省した直接態も存在的な直接態もともにその中で揚棄されている否定的統一である。相関は自分の根拠、統一へと還帰する矛盾である。そしてこの統一とは、帰ってくるものとしての反省した統一である。だがこの統一はまた同じく自己を揚棄された統一として定立しているのであるから、それは自己自身へと否定的に関係し、自己を揚棄し、自己を存在的な直接態にする」(ebd.)。

ヘーゲルによれば、自己自身に否定的に関係する根源的統一があり、それが揚棄されたものが全体と諸部分とになって発現するのである。その根源的統一は、「力は全体と諸部分との矛盾がその中へと解消した否定的統一である」(GW11. 359)と言われるように、「力」である。力を直ちに全体と諸部分の相関の根源的統一とすることの妥当性は問われる余地はあろうが、否定的統一があつてそこから相関の両項が分立するという理解には、項を前提しそこから事後的に項同士の関係を設定するのではなく、まず関係があつてそこから項が発生するという関係の第一次性と言われる事態が内包されている。その意味で全体と諸部分との相関にはヘーゲルの関係に関する独自の視点が窺われる。

(4) 全体と諸部分との相関の意義

全体と諸部分との相関が有する意義を2点挙げる。

①カントの第2アンチノミーの疑似性の解明

ヘーゲルはカントの第2のアンチノミーの反定立が無限進行にはならないことを量における連続性と分離性という観点から明らかにした。カントの第2アンチノミーに関してはマルチンがその内容に点の体系の力学(定立)と連続体の力学(反定立)の対立を読み取り、それが量子力学において光の粒子説と波動説の統合という形で普遍的な承認を得たとし、その例証としてC. F. フォン・ヴァイツゼッカーの量子力学のカント哲学に対する関係を論じた論文を挙げている⁸⁾。だがヴァイツゼッカーは論文「量子力学のカント哲学への関係」(Das Verhältnis der Quantenmechanik zur Philosophie Kants, 1941)において第2アンチノミーの反定立に関して無限分割可能性などという性質を備えた物質を現実主義的立場からは受容できないので、カントの証明は証明とはみなしえないという趣旨の主張を展開している⁹⁾。つまり科学の現場ではカントが言うような物質の無限分割は思想的には可能でも、実際には可能ではなく、意味がないということである。ヘーゲルはカント的無限性を悪無限性と批判し、第2アンチノミーの反定立が成立しないことを指摘することによって、第2アンチノミーそのものの疑似性を証示したと言える。

②非局所性概念の先取り

ヘーゲルは全体と諸部分の実在的同一性の中で「全体は諸部分に等しく、また諸部分は全体に等しい」(GW11. 356)と述べているが、ここには全体が諸部分に浸徹し、各部分に全体が反映すると

ともに、部分が全体のうちに映現するという事態が表明されている。このような全体と諸部分との関係把握には、ヘラクレイトスは別として、ライプニッツの影響が認められるにせよ、ヘーゲル自身ライプニッツがモナドは窓を持たないとしたことに対してモナドは「完全に閉ざされた世界」(GW11. 95) と批判を加えていることからすれば、全体と諸部分との相関はライプニッツ批判の上に定立されているとみることができる。ここには直接的にはヤーコプ・ベームの影響が想定される。ベームは『曙光』(Morgenröthe im Aufgang, 1612)において一個の身体がこの世の全身体と一なる身体であるとともに区別という点では一個の全存在である、と全体と諸部分との一体化を説いているからである⁽¹⁰⁾。

ところでヘーゲルが諸部分の自立性を認める限り、局所性 Locality の概念が強いと言えるが、諸部分に等しい全体という発想には非局所性 Nonlocality の概念が先取りされていると言える。アラン・アスぺの光子の協働実験の結果現代物理学において宇宙は第一次的レベルにおいて「一つの分割されない全体性」として実在しているという見解が立てられているからである⁽¹¹⁾。

4. 力とその発現との相関

(1) カントの力の規定に対する批判

ヘーゲルが「B 力とその発現との相関 Das Verhältniß der Kraft und ihrer Äußerung」として展開した内容は、カントの「反省概念の二義性について」の「2. 一致 Einstimmung と対立 Widerstreit」に向けられている。カントはそこで純粹悟性によって表象される実在性（「本質的実在 realitas noumenon」）には、何らの対立も考えられないが、現象における実在的なもの（「現象的実在 realitas phaenomenon」）は相互に対立することがあるとし、例として同一直線上の二つの動力が一つの点を相反する方向に引いたり、押したりする場合を挙げている（vgl. KrV. A264f., B320f.）。現象的実在として力が考えられていることは明白であるが、カントが考える本質的実在も実体として力を有するものとして措定されていることは、次の反省概念「内的なもの」が「内的実在性に関与する力を持たねばならない」（KrV. A265, B321）と言われるところから推認される。仮説的とされるにせよ、カントは「唯一の根源的な、すなわち絶対的な原力 Grundkraft」（KrV. A649, B677）の存在を想定し、その発現を多様な力、すなわち引力や斥力と捉えたとみることができる（vgl. KrV. A265, B321）。実際カントは『自然科学の形而上学的原理』（Metaphysische Anfangsgründe der Naturwissenschaft, 1786）において斥力と引力を二つの根源力とし、それらの作用－反作用から物質の運動を解明しようとしている（vgl. SzN. 47-99）。

ところでヘーゲルは「a 力が制約されてあること Das Bedingtheit der Kraft」においてカントが展開した力の規定を自己の視点から3点にわたって批判する⁽¹²⁾。

①物と力との関係

ヘーゲルは、『自然科学の形而上学的原理』を念頭において、カントにおいては物あるいは物質と力との関係が外的であることを批判する。ヘーゲルによれば、物あるいは物質は「現実存在するあるもの」（GW11. 360）であり、これに対して力は「存在的な直接態の契機」あるいは「定立された

存在」として「現実存在するものないしは物質に属するもの」(ebd.)である。ここから物と力との関係が次のように捉えられる。「力は外的に物と結びつけられ、疎遠な強制によって物に押し込められているというように現れる」(ebd.)。

さらに、ヘーゲルによれば、力が直接的な存立と捉えられるならば、力は「物の静止的な規定態一般」(ebd.)として物質とされ、磁気力、電気力等の代わりに磁気物質、電気物質等が仮定され、引力の代わりに「微細なエーテル」が仮定されたりする⁽⁴³⁾。しかし、「力は一定の物質ではない」(GW11.361)

②力と発現との関係

ヘーゲルがカントの力の概念の第2の問題点とするのは、力が本質的実在と把握される限り、それは「即自存在的かつ直接的な活動性」(ebd.)にとどまることである。ヘーゲルによれば、力は外化して「直接的定在」となるとはじめて力であることになる(vgl. GW11.359)。したがってカントの本質的実在としての力は、「自己へと関係する否定的統一」(GW11.361)であるが、「自己自身から出て現実存在する外的な多様態になるもの」(ebd.)として定立されなければならない。こうしてヘーゲルは力を「反省した存立〔内在〕と直接的な存立〔外化〕との、換言すれば形式統一と外的自立態との統一」(ebd.)と把握する。

③力同士の前提-制約関係

ヘーゲルがカントの力把握の問題点の第3に挙げるのは力が前提-制約関係にあることが捉えられていないことである。ヘーゲルは「前提並びに制約」(ebd.)が「反省した統一」としての力と「外的な直接態」としての力の間にあるだけでなく、カントが現象的実在とした二つの力(引力と斥力)の間にもあり、この関係が捉えられないことによって、カントにおいては「この他の力は、初めの力の定立する活動性、すなわち自分の規定する運動の中で直接に自己へと還帰する反省の彼岸にある」(ebd.)という問題があることを指摘する。

(2) 力への新しいアプローチ

ヘーゲルは「b 力の誘発 Die Sollizitation der Kraft」においてカントにおいて見出された問題点②③に自己の見地を対置する。

①相互前提を介した力と発現の関係

ヘーゲルの力とその発現の関係把握は次のようになる。力のうちには第一に「反省した統一」すなわち発現前の力と「その直接的定在」すなわち発現した力とが直接的なものとしてあるが、それぞれがその他者に移行している(vgl. GW11.359)。すなわち力はその発現へと移行するが、この発現という外的なものは消失するもので、その根拠としての力に帰ってゆき、力によって担われかつ定立されたものとしてのみ存在する。この力の移行する運動は「生成・消滅する運動」(GW11.360)であるが、同時に「自己への否定的関係」(ebd.)であり、力は自己自身によって定立された変化の中でそれがあるところのものであり続ける。したがって力とその発現の運動は永続的運動となる。このことは力が世界の根拠とされることから決定されている(vgl. GW11.357)。その際根拠としての力に帰った力は、「反省した、自己へと関係する統一」であるが、それ自身揚棄されたもの

として「契機」である。つまりこの統一は発現した力によって媒介されており、この他者を制約にしている。だが同時に発現した力も反省した力によって媒介された契機であって、制約されている。したがって二つの力は相互的な制約—前提関係に立つことになる（vgl. GW11. 362）。その場合、ヘーゲルによれば、二つの力はそれぞれ制約されたものとして自己へと反省する統一を「揚棄された統一」として含み、自己自身を「外的なもの」「外面態」「契機」として定立する。だがそれぞれの力は自立的なものとして自己へと反省した統一でもあるから、それぞれの力は自分の外面態を「他の力」として定立する（vgl. ebd.）。

ところでそれぞれの力は他の力を前提する活動性として自己内反省でもあるから、自分の否定、すなわち他の力を揚棄する運動であり、この否定を自分自身として、あるいは自分の外的なものとして定立する。つまり最初は他の力としたものを自分自身のものとする。言い換えれば自分自身を他の力に変えてしまうのである。こうしてそれぞれの力は制約するものとして、相互に自分が他の力が活動するための「動因 Anlaß」（ibd.）である。つまりそれぞれの力は自己自身でありながら、自らのうちに他の力を内含し、他の力を現実化する運動なのである。したがってヘーゲルは言う。「力はそれ自身のもとで自分の否定態である」（ibd.）。こうして自己を発現する力は初めに前提する活動性、すなわち他力にすぎなかったものと同じものなのである。だが同時にヘーゲルは、自己を発現するものとしての力は「外面態を否定して外面態を自分のものとして定立する運動」（ibd.）である、とつけ加える。つまり、力は反省した統一あるいは直接的定在などと規定が移行する運動の中で自己へと反省しかつ自己を保持する運動であるということである。

②誘発するものと誘発されるものの交互作用

ヘーゲルは制約—前提という観点を「誘発するもの」（ibd.）と「誘発されるもの」という二つの力の展開にも設定する。この展開過程はカントの引力と斥力の概念を前提にしている。カントは『自然科学の形而上学的原理』において物質を構成する根源的力を引力と斥力とし、物質の概念において両者はいずれも他から切り離せないとしている（vgl. SzN. 66）。そしてカントはこれらの両力の働きを作用と反作用の関係において捉えた（vgl. SzN. 79）。これに対してヘーゲルは二つの力の関係を作用と反作用の一体的関係において捉える。具体的には次のように展開される。一方の力（A）はまず初めに誘発する力〔作用する力〕として、他方の力（B）は誘発される力〔反作用する力〕として区別して規定される。したがって一方の力（B）は動因たる他方の力（A）に誘発される。しかし、ヘーゲルによれば、力は制約—前提関係から自らに対立する規定を自己のうちに含み、自己自身へと反省し、動因が外的なものであることを揚棄し（vgl. GW11. 363）、力は自ら発現する。したがってその力（B）が誘発されていることは、その力（B）自身の行いである。つまり誘発する力（A）はそれの他方の力（B）へ否定的に関係し、その結果その力（A）は他方の力（B）の外面態を揚棄する。だがその力（A）が誘発するものであるのは、その力（A）が発現へと誘発される限りである（vgl. ebd.）。逆に初めの力（B）は、それ自身が他方の力（A）を自分（B）を誘発するよう誘発する限りでのみ誘発されるのである。

したがって二つの力は同時にそれぞれが他方の力から動因を受け取るが、ある力が受け取る動因はその力自身によって誘発されているのである。つまり与えられた動因と受け取られた動因は、直

接的なものではなく、媒介されており、しかも2つの力のそれぞれがこのことによってそれ自身他方の力が自分に対して持っている規定態なのであり、他方の力によって媒介されている (ebd.)。したがって、ある力 (B) に他方の力 (A) によって動因が生じるという限りでは、その力 (B) は受動的に振舞うが、しかし力が受動態から能動態に移行し発現するということは、「力の自己自身への回帰」(ebd.) である。

こうして、ヘーゲルによれば、力が発現するということは、力が外面態を自分自身の契機として定立し、かつそれとともに、その力が他方の力によって誘発されているということを揚棄し、自己へ回帰するという意味で「反作用」である。こうした事態は次のように表現される。

「制約された存在と動因とがそれに属している前提する反省は、それゆえに、直接自己へと復帰する反省でもあり、そして活動性は本質的に反作用する活動性であり、自己に対して反作用する活動性である」(GW11. 363)。

すなわち力が自己を発現することは、活動性としての作用であるが、それ自身自らが産出した動因に対する反作用である。したがってヘーゲルは力の発現を作用と反作用の一体性と捉える。このようにして、カントにおいてはその都度作用と反作用という前後関係として捉えられた引力と斥力の関係は、双方が自分が他を定立する活動において直接に自己へと還帰する反省と捉え返されたのである。

(3) 力の運動の真実態としての無限性

ヘーゲルは「c 力の無限性 Die Unendlichkeit der Kraft」において、力が実際には無限性であることを説く。すなわち力はその諸契機 (内在と外化) が直接態という形式を持っているかぎり、力はその形式に関しても内容に関しても制限されている。独立した力および外化した両力という形式に関する規定態は、発現しない力は実際の力でなく、発現した力は引力あるいは斥力という相反する力であるという内容の制限をも含んでいるからである。

だがヘーゲルは言う。「力の活動性は自己を発現することにある」(GW11. 364)。この文の意味は、内在的であるという外面態を揚棄して力の中で自己と同一的であるということである。したがって力が真に発現することは、ヘーゲルにおいては、力の他者、すなわち発現への関係が力の自己自身への関係であり、力の受動態が力の能動態そのものに存するということである。したがって「力がよってもって活動性へと誘発されるゆえんの動因は力の固有の誘発する運動である」(ebd.) と言われる。力のもとに現れてくる外面態は、直接的なものではなく、力によって媒介されたものである。そのような外面態の在り方は、力の固有の本質的な自己との同一性が直接的ではなくて、力の否定によって媒介されていることによって規定されている。したがって「力は力の外面態が力の内面態と同一であるということを発現する」(ebd.) のである。ヘーゲルはそのことを無限性という概念に即して開示したのである。

そしてこのような無限性の概念を提示することによって、ヘーゲルはカントが真理基準とした矛盾律の問題性を開示したと言える。カントによれば、「いかなる事物にもそれに矛盾する述語は付加されないという命題は、元来矛盾律と呼ばれ、一切の真理の、単に消極的ではあるが、一般的基準

である」(KrV. A151, B190)。カントは、続けて矛盾律を「あらゆる分析的認識の普遍的にしてかつ十分な原理」(KrV. A151, B191)と規定している。これに対してヘーゲルは力を「自己自身から自己を突き放す矛盾」(GW11. 361)と定式化することによって矛盾律があるがままでは真理基準たりえないことを証示したと言える。ヘーゲルからすれば、矛盾律は一つの規約でしかないということである。

(4) 力とその発現との相関の意義

ここでも「力とその発現との相関」の意義を2点に限定して言及したい。

①力の有限性の明示

ヘーゲルは、力が直接態として捉えられるならどんな力も有限であると言った。力はどの形態も他のものを前提するという意味では制約されており、その限り有限となる。そのような限定されたものを究極的なものであるかのように想定し、駆使しても事象の解明につながらないことは明らかである。これは力を説明原理とするカント的な力動主義への批判として妥当する。因みに現代物理学においては「力」は利用されず、ヤンマーによれば、エネルギーの空間的な変化率が代わりに使われている⁽¹⁴⁾。

②物質と力との二元性を超える視点の提示

ヘーゲルが力とその発現との相関で指摘したことの一つは、カントにおいては力が物質に外的に結びつけられているという形で物質と力との二元性があることである。量子物理学者のハイゼンベルク (Werner Heisenberg, 1901-1976) は、19世紀の自然科学を支配したものとして「物質と力との二元性」を挙げ、現代物理学においてはどんな力の場もエネルギーを含み、その限りで物質を形成する、と捉えることによって物質と力の区別がなくなったことを指摘している⁽¹⁵⁾。カントが熱の源を当時のカロリック calorique 説に依拠して「熱素 Wärmestoff」(SzN. 95)としていたことは明白である。ヘーゲルが熱を運動として捉えていたことは、後になるが『エンツュクロペディー』においてランフォード (Sir Benjamin Thompson, Count of Rumford, 1735-1814) の熱の実験 (An Inquiry concerning the source of the heat which is excited by friction, 1798) を挙げていることから明らかである⁽¹⁶⁾。光の波動説を唱えたヤング (Thomas Young, 1773-1829) は、ランフォードの考えを受け入れ、熱を「エネルギー energy」という用語で表現した最初のひとであった (Lectures on natural philosophy and the mechanical arts, 1807)⁽¹⁷⁾。ヘーゲル自身はヤングの著書を読まなかったようで、エネルギーという概念を駆使するには至らなかったが、カントの力の概念に対する批判からはヘーゲルがエネルギー—元論に接近していたことは読み取れる。なお、ヤンマーによれば、エネルギーの概念はライブニッツの活力 (vis viva) と同じものである。したがって用語はともかく、ヘーゲルが運動をエネルギーの現れと捉えたとしても何ら奇異ではない⁽¹⁸⁾。

5. 外的なものとの内的なものとの相関

(1) カントの「内的なものとの外的なもの」に対する批判

ヘーゲルは本質的相関の第3形態「C 外的なものとの内的なものとの相関 Das Verhältnis des Äußern und Innern」をカントの「反省概念の二義性について」の「3. 内的なものとの外的なもの Das Innere und Äußere」に対する批判として展開している。そこでカントは純粹悟性の対象として自己と異なるものに対する関係を全然有しないものを「内的なもの」とし、内的規定として「内的実在性に関与する力」(KrV. A265, B321)を持つとする。このような内的なものは、「あらゆる変易的なものの基体としての常住不変なもの、すなわち実体」(KrV. A205, B250)にほかならない。これに対して空間における「現象的実体 substantia phaenomenon」(KrV. A265, B321)の内的規定である諸関係、具体的には他を引き寄せる力(引力)や自分に侵入してくるものを阻止する力(斥力や不可侵入性)が「外的なもの」とされる(vgl. ebd.)。カントの内的なものは、上で見たように、「自己と異なったものに対する関係を有しないもの」、すなわち純粋な自己同一的なものでしかない。だがこの内的なものは、実体として「内的実在性に関与する力」を有するものである以上、「力とその発現の相関」に即して発現・外化しなければ力ではない。またカント自身実体の原因性としての「力」と関連して、様々な現象を「同一な力の異なった現れ」(KrV. A648f., B676f.)としている。このように見ると、カント自身の中で内的なもの、特にその原因性とされる力の把握は一貫性を欠いている。

このように見ると、ヘーゲルの外的なものとの内的なものとの相関の展開はカントの実体と偶有性の関係把握に対する先行的批判という性格を持っている。先行的と言うのは、具体的なカントの実体把握に対する批判は「第3編 現実性」「第3章絶対的相関」「A 実体性の相関」で展開されるからである(vgl. GW11. 394ff.)⁽¹⁹⁾。

ところでヘーゲルがカント的な内的なものとの外的なものとの対立をアリストテレスのデュナミス-エネルゲイアの対概念によって超克しようとしたことは、『エンツュクロペディー』の「現実性」の補遺においてアリストテレスのデュナミスを「内的なもの」とし、エネルゲイアを端的に外的になった内的なものすなわちデュナミス、あるいは「内的なものとの外的なものとの統一」としていることから読み取れる⁽²⁰⁾。そしてこのような内的なものとの外的なものとの統一によってヘーゲルが目指したものは、「現象」の章より高次の次元での現実的世界肯定の論理である。

(2) 内的なものとの外的なものとの内容と形式

さて、ヘーゲルは「内的なもの」を、存在の形式としての「外的なもの」に対して、「反省した直接態ないしは本質の形式」(GW11. 365)と規定し、内的なものが初めて本質と規定されるに値するものであることを提示する。しかしヘーゲルは内的なものとの外的なものをカントのように別のものとするのではなく、まず内容に関して内的なものとの外的なものとの両者に「ただ一つの同一性」(ebd.)があることを指摘する。ここにカントの内的なものとの把握に対する第1の批判が認められる。ともかくヘーゲルは内的なものとの外的なものとのこの同一性を「内容に満ちた基礎としての両者のしっか

りした統一」「絶対的事柄」（GW11.365）と規定する。

しかし、ヘーゲルは内的なものと外的なものが内容的に単一の事柄であるにせよ、両者が「形式規定からは差異されている」（ebd.）ことを確認する。つまり内的なものは自己内反省ないし実在性の形式を持ち、外的なものは他者へと反省した直接態ないし是非実在性の形式を持つ。相関の本性は異なる形式規定が「端的にただ一つの同一性」（ebd.）を成していることにあるにせよ、内的なものとの外的なものに、「単一な形式」（ebd.）を直ちに持ち出すことは「純粋な抽象的媒介」（ebd.）でしかない。そこで、内的なものと外的なものという形式規定に従って定立されているものは、「形式という規定態のうちにあるにすぎない総体性ないしは事柄そのもの」（GW11.366）であるので、この総体性または事柄を二つの対立した規定の一方の規定のうちにあるべきこととしても、内的なものは本質、外的なものは存在と規定されることになり、ヘーゲルはこのような内的なものを「欠けたところのあるもの」（ebd.）と言う。もちろん内的なものだけが本質とされるなら、外的なものとの関係性が無視されるからである。こうしてヘーゲルはこれまでの展開では外的なものと内的なもの両者を含んでいる「同一の基礎」（ebd.）が欠けているとする。ヘーゲルによれば、両者を結合している否定的統一は「単一な、内容を欠いた点」（ebd.）にすぎない。このような形でヘーゲルが表明したのは、内的なもののみを本質とする伝統的本質概念の不十分さである。

（3）内容の同一性と形式の同一性ととの統合

以上を踏まえ、ヘーゲルはこれまでの展開で確認された外的なものと内的なものとの同一性を2つに分ける。第1の同一性は、内的なものと外的なものという形式規定の区別に対して無関心な基礎である「内容としての同一性」（GW11.368）である。第2の同一性は、内的なものと外的なものとの区別に媒介されていない形式の同一性、すなわちそれぞれの規定の自分の反対の規定への直接的反転としての「純粹形式としての同一性」（ebd.）である。ヘーゲルはこれら2つの同一性を一つの総体性の両側面とし、この総体性を一方の同一性の他方の同一性への転換と捉える（ebd.）。ここでも総体性は世界を意味する。かくしてヘーゲルによれば、基礎および内容としての総体性は、形式の前提的反省によってのみ自己へと反省した直接態であり、この形式の前提的反省は、二つの同一性の区別を揚棄し、自己をこの区別に対する無関心的な同一性あるいは反省した統一として定立する。つまり形式と内容は同一となるのである。したがって形式の区別、すなわち内的なものと外的なものはそれぞれがそれ自身のもとで自分と自分の他者との総体性として定立されている。

こうしてヘーゲルは内的なものと外的なもの相互に移行する運動を基礎として現実化されるものをそれらの直接的な同一性であるとともに、それらの「媒介された同一性」（ebd.）として捉える。すなわち内的なものとの外的なものとの根底にある基礎すなわち内容が同一性であるから、両者には直接的な同一性が存する。相互に移行する運動が媒介された同一性をもたらすのは、内的なものとの外的なものそれぞれがまさに自分の他者によって本来的にあるところのものであり、相関の総体性だからである。その結果次のように言われる。「総体性はこうして形式または規定態によって自己自身と媒介されており、〔外的なものと内的なものという〕規定態はそれの単一な同一性によって媒介されている」（ebd.）。

つまり内的なものは内容及び形式において自己への反省であり、かつ外的なものの形式および内容の自己への反省でもあることになる。すなわち内的なものの内容と形式は同時に外的なものの内容と形式でもあるのである。いささか図式的な印象を否めないが、デュナミスーエネルゲイア概念を援用すればこのような結末になる。このようにして内的なもののみを本質とする伝統的本質概念は克服されたことになる。そしてここにあるのはそれ自身が自己の本質を発現し、存在として現実化した世界である。

ヘーゲルがカントとは違って内的なものすなわち本質よりも外的なものすなわち外面態を重視したことは、「あるものが何であるのかということ、まったくあるものの外面態のうちにある」(ebd.)と述べているところに如実に表明されている。ヘーゲルによればあるものの外面態はあるものの総体性であり、その自己へと反省した統一である⁽²⁰⁾。したがってあるものの現象、外面態はそれが本来あるところのものの発現であり、「あるものの本質を開示する運動 Offenbaren」(ebd.)である。本質は自己を開示するものであり、本質の相関は外的なものとの内的なものとの、現象と本質との同一性において自己の規定を完了し、論理学のテーマはつぎの「現実性 Wirklichkeit」(ebd.)になっている。

(4) 外的なものとの内的なものとの相関の意義

ここでも2点に限って意義を確認したい。

① エネルギーと物質との関係の先行的理解

ヘーゲルの外的なものとの内的なものとの関係把握の意義の一つは、彼がアリストテレスのデュナミスーエネルゲイア概念に依拠して、エネルゲイアを内的なものすなわちデュナミスと外的なものとの統一としていることである。このような運動把握はハイゼンベルクの素粒子の基本把握がある面で大先取りしていると言える。つまりハイゼンベルクによれば、あらゆる素粒子はエネルギーあるいは普遍物質が形を変えて現れたもので、次のように捉えられる。「(略)アリストテレスの質料は単なる『ポテンティア potentia』すなわち可能性にすぎないが、これは我々のエネルギーの概念に比定されるべきものである。つまりエネルギーは素粒子が作られるとき、現象の中で形相を得ることによって物質的実在性として現れる」⁽²¹⁾。ここで言われる potentia はギリシャ語デュナミスのラテン語訳であり、それが形相を得ることによって物質的実在性すなわちエネルゲイアとしての素粒子になることが述べられている。つまりヘーゲルの内的なものとの外的なものとの関係把握は、力とその顕現との関係把握と重ね合わされるなら、エネルギーとその現れとしての物質との関係に対する先取りと言える。

② 内包的秩序の思想の予見

ヘーゲルの外的なものとの内的なものとの関係把握のうちには、実際にはまだ存在していないものもまた実在しているという「内包的秩序 implicate order」の思想が大先取りされている。ヘーゲルは外的なものとの内的なものとの相関の注解において本質が内的なものとして捉えられれば、植物の芽や子どもは内的植物、内的な人間にすぎないと指摘している (vgl. GW11. 367)。だが芽および子どもは時間の展開の中で大木にも強壯な大人にもなりうる素地・資質を有しているという意味でまだ存在

していないものを含んでいると言える。ヘーゲルの「即自的 an sich」という用語はこのような意味を持ち、「内的」と同義と言ってよい。このような内的なものの把握はライプニッツの「現在は未来をはらんでいる」⁽²³⁾という思想に触発されたものと言えるが、それは現代物理学における「内包的秩序」の思想の先取りともいえる。物理学者のボーム（David Bohm, 1917-1992）は内包的秩序を「在るもの」の秩序として、そこでは、存在するものだけが実在し、存在していないものは実在しない、という考え方に対し、実際には存在していないものもまた実在している、という考えが是認されるとしている⁽²⁴⁾。ヘーゲルが単に既存のものの把握に終始したのではないことは彼の内的なものに関する多様な議論から知ることができる。

むすびにかえて一動的な世界把握の定礎

ヘーゲルの本質論の要諦は、世界をどのように把握—論理化することにあつたと言える。世界理解そのものについていえば、現実世界に存在するものすべてを生成・消滅・変化という運動するものと捉える視点からプラトン—カント的二世界説を打破した。次いで動的な関連概念を設定し、その展開の場として世界を捉えた。カントにおける関連概念は反省概念として定式化されながら、関連項は固定的な対立関係においてしかとらえられなかった。それに対してヘーゲルの関連概念は実在化がそれ自身の運動であるかのように構成され、そのことによって世界そのものの動的特性が定立されることになる。すなわちカントは世界を「因果性の力学的法則にしたがう現象の諸関係」（KrV. A227, B280）とする力学的世界像を提出したが、ヘーゲルは世界を事物が一定の規則性に従って生成・消滅する動的な場と捉える動的な世界把握を定礎したと言える。

ヘーゲルの世界理解の現代的意義の一端は共時性および通時性における世界把握の更新のうちに認められる。共時性という観点からは、ある出来事から空間的に離れた距離にいる実験者はその出来事に影響を与えることはできないと考えられてきた。こうした考え方は「局所原因の原理」と名付けられている。ヘーゲルは世界の一体性を説く形で、アスペなどの実験を先取りする形で、一つの面で世界のうちで局所原因の原理が成立しないことを明言している。また通時性において局所原因の原理が成立しないとする見地はボームの内包秩序の思想において表明されており、そこにヘーゲルの内的なものの把握との共通性が確認される。内包的秩序の実験的実証はなされていないが、時間の向きが逆ではあるものの、ホイーラー（J. Wheeler）の遅延選択実験はその可能性を秘めているかもしれない⁽²⁵⁾。ただしここではこれ以上の妄言は慎む。

ヘーゲルの世界理解は、今後科学の進展に伴って新たな解釈を許容する可能性を残しているが、そのこととは別にヘーゲルの世界理解がハイデッガーが否定的に捉えた近代的な「世界像」⁽²⁶⁾とどう関連するかが本論の根本的関心であった。この関心を掘り下げる作業は別の形で果たすことを明記して擲筆する。

（たけむら・きいろう つくば国際大学非常勤講師）

参考文献

Reinhardt Grossmann (1983): *The Categorical Structure of the World*, Indiana University Press, Bloomington.

Gerold Prauss (1990–2006): *Die Welt und wir*, Verlag J. B. Metzler, Stuttgart.

Walter van Laack (2005): *Mit Logik die Welt begreifen*, van Laack Buchverlag, Aachen.

テキスト

括弧内の略符号はそれぞれ次のテキストを表し、後続する数字でページ数を示す。

GW11 = Georg Wilhelm Friedrich Hegel *Gesammelte Werke*, Band 11 : G. W. F. Hegel, *Wissenschaft der Logik. Erster Band: Die objektive Logik* (1812/1813), herausgegeben von F. Hogemann und W. Jaeschke, Felix Meiner Verlag, Hamburg 1978. 引用に際しては寺澤恒信訳・ヘーゲル『大論理学』2 (以文社, 1983年) を参照したが、訳文は適宜変更を加えた。

KrV = Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft* (1.A. 1781, 2.A.1787), herausgegeben von R. Schmidt, Felix Meiner, Hamburg 1956. Aで初版, Bで第2版を表し, その後の数字でページ数を示す。

SzN = I. Kant, *Schriften zur Naturphilosophie*, Werkausgabe Band IX, herausgegeben von W. Weischedel, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main 1977.

注

- (1) ヴェルフレは、ヘーゲルが生成・消滅・変化の背後に本質ないしは実体を残しているかに記述しているが、ヘーゲルは現象背後の本質という常住不変なものなど設定していない。Vgl. Gerhard Martin Wölfe, *Die Wesenslogik in Hegels „Wissenschaft der Logik“: Versuch einer Rekonstruktion und Kritik unter besonderer Berücksichtigung der philosophischen Tradition*, F. Frommann Verlag · G. Holzboog, Stuttgart-Bad Canstatt 1994, S. 279f., 289.
- (2) ガリレイの落体の法則の証明に関しては、現代でも賛否両論がある。否定的なものの代表として次の箇所を参照されたい。E. J. Dijksterhuis, *The Mchanization of the World Picture*, translated by C. Dikshoorn, Oxford University Press edition 1961, Princeton University Press, Princeton 1986, pp. 340–354.
- (3) ヘーゲルが超感性的世界を現象的世界に還元する点にデュクはニーチェとの共通性を見ているが、論理性においてヘーゲルのほうが勝ることは明白である。Vgl. Félix Duque, *Die Erscheinung und das Wesentliche Verhältnis*, in : G. W. F. Hegel : *Wissenschaft der Logik*, herausgegeben von A. F. Koch und F. Schick, Akademie Verlag, Berlin 2002, S. 151f.
- (4) ヘーゲルの本質的相関の3形態はすべてカントの「反省概念」批判の意図があるのに、ウラディカはその意図を明確にし切れていない。Vgl. Michael Wladika, *Kant in Hegels "Wissenschaft der Logik"*, Peter Lang, Frankfurt am Main 1995, SS. 359–400.
- (5) ヘーゲルの全体と諸部分の相関はカント批判が眼目であるが、この相関が古代より定立されたものであることをヘーゲルは青年時代から熟知していた。具体的にはヘラクレイトスの「一

緒に結びついているもの。それは全体と全体ならぬもの。寄せ集められたものと分け離されたもの」（断片10）という箴言がある。Vgl. *Die Fragmente der Vorsokratiker*, Griechisch und Deutsch von H. Diels, herausgegeben von W. Kranz, erster Band, Weidmann, Dublin/Zürich 1972, S. 153. 訳文は廣川洋一先生（1997）『ソクラテス以前の哲学者』講談社学術文庫，232ページより拝借した。この場を借りて廣川先生から賜った学恩に感謝申し上げる。

- (6) カントの第2アンチノミーに関するヘーゲルの扱いには対立する評価がある。ルレウエリンは、ヘーゲルが第2アンチノミーの定立も反定立も量が問題であることを明らかにしたことに意義を認めながら、反定立がヘーゲルが言う意味での連続性と離散性によって解決するとは見ない。Cf. John Llewellyn, *Kantian Antinomy and Hegelian Dialectic*, in: *Hegel's Critique of Kant*, edited by S. Priest, Clarendon Press, Oxford 1987, pp. 86–101. ヴェルフレは、カントの第1アンチノミーの反定立の内容（世界の無限性）をヘーゲルが十分考慮に入れていない点において誤っているとする。Vgl. Wölffe, a.a.O., S. 354f.

これらに対して、ウラディカは、ヘーゲルの指摘にしたがってカントは量の連続性と離散性を統合できなかったとしている。Vgl. Wladika, a.a.O., S. 370f.

- (7) ここには明白にヘラクレイトスの「万有の一性」の思想が鳴り響いている。ヘラクレイトスに次の有名な言葉がある。「私にはなく（かの）理（ロゴス）そのものに耳を傾けるなら、万物が一なることを認めるのが（理にかなった）賢いあり方というものである」（断片50）。*Die Fragmente der Vorsokratiker*, I, S. 161. 廣川，前掲書238ページ。ヘーゲルの青年時代の、ヘルダーリンを含む友人仲間の合言葉は「hen kai pan（一にして全）」だったとされる。Vgl. *Briefe von und an Hegel*, Bd. 4. Teil 1, herausgegeben von F. Nicolin, Felix Meiner Verlag, Hamburg 1977, S. 136. この言葉はレッシングに由来すると言われるが、元をたどればヘラクレイトスに行き着く。当然ヘーゲルはこのことを知っていたと思われる。
- (8) Vgl. Gottfried Martin, *Immanuel Kant. Ontologie und Wissenschaftstheorie*, Walter de Gruyter & Co., Berlin, erste Auflage 1950, vierte Auflage 1969, S. 61.
- (9) Vgl. Carl Friedrich von Weizsäcker, *Zum Weltbild der Physik*, S. Hirzel Verlag, Stuttgart, erste Auflage 1943, 13. Auflage 1990, S. 103, 151.
- (10) Jakob Böhme, *Morgenröthe im Aufgang*, in: J. Böhme, *Sämtliche Schriften*, erster Band, neu herausgegeben von W.-E. Peukert, Frommanns Verlag, Stuttgart 1955, S. 364.
- (11) Cf. Alain Aspect and Philippe Grangier, Experiments on Einstein-Podolsky-Rosen-type correlations with pairs of visible photons, in: *Quantum Concepts in Space and Time*, edited by R. Penrose and C. J. Isham, Clarendon Press, Oxford 1986, pp. 1–15. Robert Nadeau and Menas Kafatos, *The Non-Local Universe: The new Physics and Matters of the Mind*, Oxford University Press, Oxford 1999, pp. 188–190.
- (12) ここでもヘーゲルがカント批判の後ろ盾としたのはヘラクレイトスだと考えられる。ヘラクレイトスの世界把握は典型的には次のように表明されているからである。「万人にとって同一のものたるこの宇宙秩序（コスモス kosmos）は、いかなる神も、人も造ったものではけっしてない。それは常にあったし、今もあり、これからもあるだろう。それは常久（とこわ）に生きる

火であり、一定の分だけ燃え、一定の分だけ消える」(断片30)。Die Fragmente der Vorsokratiker, I, S. 157f. 廣川, 前掲書235ページ。ヘーゲルはここではヘラクレイトスの火を力に変えて世界の原理としたと解される。

- (13) カントは『自然科学の形而上学的原理』において、ニュートンがエーテルを引力の法則から除外しなかったことに倣って、エーテルに斥力も認めている。Vgl. SzN. 72, 98.
- (14) Cf. Max Jammer, *Concepts of Force : A Study in the Foundations of Dynamics*, Harvard University Press, Cambridge 1957, p. 248.
- (15) Vgl. Werner Heisenberg, *Physik und Philosophie*, (1959), Ulstein, Frankfurt am Main 1984, S. 121.
- (16) Vgl. G. W. F. Hegel, *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse* (1830), zweiter Teil : Die Naturphilosophie § 304, in : Hegel Werke in zwanzig Bände, Band 9, herausgegeben von E. Moldenhauer und K. M. Michel, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main 1970, S. 197ff.
- (17) Cf. Charles Singer, *A Short History of Scientific Ideas to 1900*, Oxford University Press, Oxford 1959, p. 376.
- (18) Cf. Jammer, op.cit., p. 166. ヘーデルは『エンツュクロペディー』第3版 §316 では自然を探求する人間の能力を「理性のエネルギー」と定式化している。Vgl. Hegel Werke, Bd. 9, S. 222.
また、ロムバツハによれば、ヘーゲルが思想形成の際に大きな影響を受けたケプラーは、太陽の諸惑星に対する支配の源泉を「力またはエネルギー」(vis seu energia) としている。Vgl. Heinrich Rombach, *Substanz, System, Struktur I*, Verlag Karl Alber, Freiburg/ München 1966, S. 303.
- (19) ヴェルフレにおいては、本質的相関の中心が「力とその発現」におかれ、「外的なものとの内的なもの」の相関は粗略に扱われ、結果としてヘーゲルが本質的相関において目指した境地が不明確になっている。Vgl. Wölffe, a.a.O., SS. 384–388.
- (20) Vgl. Hegel, *Enzyklopädie*, erster Teil : Die Wissenschaft der Logik, § 142 Zusatz, Hegel Werke, Band 8, S. 280f. アリストテレスの dynamis-energeia の把握については以下を参照。
Aristoteles, *Metaphysica*, 1048a30-b9, edited by W.D.Ross, Oxford University Press, Oxford 1924. 『アリストテレス全集12 形而上学』, 出隆訳, 岩波書店, 302–303ページ。
- (21) 現代の自然科学において物質は他の物質との作用の仕方としてしか記述できず、カント的な意味での内的なものあるいは実体としては記述できないことが確認されている。Cf. Peter Mittelstaedt, *Philosophical Problems of Modern Physics*, D. Reidel Publishing Company, Dordrecht 1976, pp. 115–121.
- (22) Heisenberg, a.a.O., S. 132.
- (23) Gottfried Wilhelm Leibnitz, *Monadologie*, § 22, in : Derselbe, *Vernunftprinzipien der Natur und der Gnade/ Monadologie*, Felix Meiner Verlag, Hamburg 1956, S. 36.
- (24) Cf. David Bohm, *Wholeness and the Implicate Order* (1980), Ark Paperbacks, London 1983, p. 203. ボーム自身自分の理論とライブニッツのモナドの観念との近さを認めている。Cf. *ibid.*, p. 207.
- (25) ホイラーの遅延選択実験については、並木美喜雄『量子力学入門—現代科学のミステリー—』(岩波新書, 1992年) 129–135ページ参照。

- (26) Martin Heidegger, Die Zeit des Weltbildes (1938), in : Derselbe, *Holzwege*, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, fünfte Auflage 1972, SS. 69–104.

Hegel's Outlook on the World in the Doctrine of Essence in the Science of Logic

Kiichiro Takemura

Whereas I. Kant distinguished a phenomenal world from a noumenal one in the Critique of Pure Reason, G. W. F. Hegel unites these worlds and calls the noumenal one the inversion of the other in the Doctrine of Essence. Still more Hegel criticizes Kant's concept of the infinite in the Second Antinomy as false, and insists the possibility of grasping the world. Moreover he establishes the outlook that the world is the field where the things and persons perpetually become and perish.

Hegel's dynamic outlook on the world predicts the concept of Non-Locality that the events in the world are undivided, and the idea of the Implicate Order that the nonexistents are present.

Keywords: world, law, Antinomy, force, essence